

漱石作品における非外来語のカタカナ表記について

林 慧 君*

1. はじめに

カタカナで外来語を表記しようとする態度は、新井白石の『西洋紀聞』から見られるとされるが、蘭学の伝統を経て、近代以降一般的に、外来語はカタカナで表記されている。夏目漱石の作品においてもカタカナは外来語の表記に用いられるのが原則のように思われる。しかし、外来語ではないにもかかわらず、カタカナ表記が用いられている例に、例えば「イトコ」「イカサマ師」「バツタ」「カツカツ」などが見られる。本稿では、漱石作品における上のようなカタカナ表記されている非外来語を考察対象に取り上げ、これらにはどのような語があるのかを調査し、それらの表記機能や特徴などを考えてみたい。

2. 先行研究及び考察法

非外来語のカタカナ表記についての先行研究は少なくないが、そのうち本稿の主旨に最も近いものとして、成田(2009)、中山(1998)、岡村(2005)、奥垣内(2010)と四つに絞ることができる。

成田(2009)は『坊っちゃん』の中でカタカナ表記された和語と漢語を取り上げ、調査分析を行ったものだが、語種よりも語の意味や表現意図などによってその語の表記が優先的に選ばれたという点が示唆的である。だが、その調査範囲が漱

石の一作品のみであった点はやや残念である。また、主に生き物、擬音語、笑い声だけのカタカナ表記を中心に考察されており、それ以外の一般語の和語(例えば「スノコ」)などは取り上げられていない。なお、『坊っちゃん』にカタカナ表記された擬音語の例はあるが、擬態語はないと記述されている¹⁾が、果たして漱石が擬態語はカタカナ表記をしなかったかどうかということは、他の作品の調査を通して確認する必要がある。

中山(1998)は、日本語教育の観点から規範性のある新聞における非外来語のカタカナ表記の実態を調査分析したものであり、その対象は擬音(声)語・擬態語をはじめ、感動詞や専門用語などの12種と分類されるもので、かなり網羅的である。ただし、「強調」や「際立たせたい」という理由による「カネ」などのような「その他」という項目も設けられているが、一体何を強調するのかまたは際立たせたいのかといったことに関しては特に説明されていない問題が残る。

岡村(2005)は中山(1998)の分類項目を踏まえて非外来語のカタカナ表記語を分類したが、そのうちの「その他」という項目について更にウェブで検索し、片仮名表記されやすい語の性質について考察したものである。片仮名表記されやすい非外来語は、一般的にひらがなや漢字で表記される多義語の「第一義と異なる特定の意味」をもつ性質があると指摘されている。

奥垣内(2010)は、特に漢字表記とカタカナ表記によって意味の異なる語を取り上げ、認知言語学の身体性とイメージの観点から、カタカナ表記

*台湾大学・教授

語の意味と傾向、使用の動機付けにアプローチしたものである。そのカタカナ表記の有するイメージからの属性に基づき、カタカナ表記語は「漢字表記語の一種の同音異義語」と結論付けられている。

岡村（2005）や奥垣内（2010）では、「多義語の第一義と異なる意味」や「同音異義語」として非外来語をカタカナ表記する現代語の表記習慣などが指摘されているが、これらの観点に立って、漱石作品における非外来語のカタカナ表記の性質を説明できるかどうか、検討する価値があるように思われる。

本稿では漱石の表記意向を反映すると言われる、『定本 漱石全集』第一巻～第十巻（2016～2019）（岩波書店）の14の作品²を考察用のテキストに採用する。まず、これらの作品においてカタカナ表記されている非外来語をピックアップし、それらの語の性質に基づき分類し、その表記機能や特徴について考察する。

3. 考察分析

今回上記の漱石作品から、カタカナ表記の非外来語を全部で197例収集できた。語の性質によって表一のように10項目に分類できる。更にこの10項目の非外来語は、そのカタカナ表記の性質に基づき、次のように三つのタイプにまとめ直すことができる。

- 慣習的な特殊表記：ケ・ツ、特別な表記習慣
- 音の強調：擬音語、笑い声、促音・長音
- 特別な表現意図または語の周辺の意味：和語、感嘆詞、擬態語、動植物名、その他

表一 漱石作品におけるカタカナ表記された非外来語の分類と内訳

分類	慣習的な特殊表記		音の強調				特別な表現意図または語の周辺の意味				
	ケ・ツ	特別な表記	擬音語	笑い声	促音・長音	和語	感嘆詞	擬態語	動植物名	その他	
数	10	1	37	22	46	28	20	23	8	2	
%	5%	1%	19%	11%	23%	14%	10%	12%	4%	1%	

上記10項目の内、ケ・ツ及び促音・長音は文字レベルの表記ではあるが、本稿ではこれらも他の語レベルのものとひとくくりにし考察することにした。以下、三つのタイプについて説明していく。

3.1 慣習的な特殊表記

このタイプは慣習的な特殊カタカナ表記「ケ」または「ツ」が含まれる語と「ロハ台」が挙げられ、全部で11例ある。「ケ」と表記され、「か」と読む例として、漱石の作品から「^{（やかま）}八ヶ釜しい」「一ヶ月」「一ケ年」「一ケ条」「一ケ所」が拾えた。「ケ」は大文字だったり小文字だったりする。また、「つ」が含まれる数字の場合は大文字のカタカナ「ツ」と表記され、「お^{（や）}八^{（ひと）}ツ^{（とこ）}」「三^{（かど）}ツ角」「八^{（や）}ツ目」「四^{（かど）}ツ角」が挙げられる。それから、「ロハ台」の「ロハ」は「無料」という意を表す漢字の「只」を分解してできた特殊な表記であるが、既に一般化されているものと言える。この慣習的な特殊表記は現代でも通じる表記法だと見られる。

3.2 音の強調

カタカナは表音文字であり、当然それには「音の響き」という特徴も表記に含まれていると思われる³が、これをここでは表音機能と呼ぶことにする。従って、カタカナ文字が表記に用いられる場合、表音機能と特徴が活かされ、特に音を強調する表現効果が生じるわけである。このタイプには擬音語、笑い声そして促音・長音の例が含まれるが、これらの非外来語のカタカナ表記は、特にそのカタカナの表す音声が重視されたものと考えられる。

【擬音語】

漱石の作品においてもカタカナ表記されている擬音語の例が少なくなく、今回の調査では全部で37例ヒットした。物の音も人の声も含まれているが、物の音を表す語例には、例えば「ゴボゴボ」というビールを注ぐ音、算盤をはじく軽快な音「パチパチ」、「ピシヤリ」というほおを打った

音などが挙げられる。

次に、動物の鳴き声の例として、例えば、「ククク、ククク」や「ニャーニャー」などの鶏や猫の鳴き声が見られる。前述した物の音もこれら動物の鳴き声もその響きのある音を特に強調するため、カタカナ表記されたと考えられる。

なお、人の出す声に、例えば、人を黙らせる声「シーシー」や東北地方の人の鼻にかかった発音「ズーズー」、また突然泣き出す声「ワーと」などのカタカナ表記例が見られる。「ジャン拳」という語も、「じゃんけんぼん」というじゃんけんする時の掛け声を強調する含みで、カタカナ表記が用いられたと思われる。

成田（2009）では、『坊っちゃん』においては、人の出す声は笑い声以外はひらがな表記が普通であるが、「ワーと（訳もないのに）」という例だけが特殊でカタカナ表記されていると述べられている⁴。しかし、今回の調査から、漱石作品の中には笑い声以外の人の出す声にもカタカナ表記された例があった。これらからは、カタカナ表記の表音機能によってその人の声が特に強調されるという表現効果が意図されたものもあるとかがえる。

【笑い声】

漱石の作品には、カタカナ表記を通して人の笑い声をリアルに表現している例が多数見られる。例えば、「アハハハハ」「ウフハハハ」「エヘハハハ」「オホハハハ」「フハハハハ」「ワハハハハ」などで異なり語数で21例ヒットした。つまり21種の笑い方がカタカナ表記を用いて表現されているのである。成田（2009）に『坊っちゃん』の「登場人物の笑い声の叙述には、かなり漱石の意図的な表記がふくまれる」と論じられている⁵が、まさに、これらの笑い声のカタカナ表記は、その音の表現効果を強調する機能から、人物に対する漱石の表現意図が表されていると見ることができよう。

【促音・長音】

漱石作品には、促音がカタカナ表記されている例がかなり多く見られ、全部で45例も収集でき

た。例えば、「…不可ないツて云って」「…言つたツていふ」「…～のにつて」のような「つて言う」パターン、「おツ猪口ちよい」「素ツ気ない」「括ツ付いて」「打ツ切ら棒」などのようなそもそも語形に促音があるパターン、そして「書生しよせツ坊ぼ」「素ツ裸体」「水ツばい」「貰もらいツ子」「横ツ腹」などの強調形の語例も見られる。

日本語俗語の音声的特徴に関する町（2000）によると、無声子音の前の促音挿入によって「強調やぞんざい感やあいらしさといった俗語の表現効果」が出るとのことである⁶。漱石も、促音のカタカナ表記を用いることによって、促音のもつ強調などの表現効果を通して、感情的な表現意図を強調して伝えようとしていたのではないかと考えられる。なお、長音をカタカナで表記する「婆さん」の例も、同じく強調やぞんざいといった感情的な表現意図が見られる表記であろう。

要するに、漱石の作品に見られる擬音語、笑い声そして促音・長音が含まれる語は、カタカナ表記の表音機能を通して物の音や人の声を強調したり、また音による作者漱石の感情的な表現意図を表したりするための仕掛けと理解できよう。

ところで、以上の擬音語と人の笑い声・掛け声と促音・長音の例が合わせて105例もあるが、これは今回の調査データの半数以上（53%）を占めている数であることからして、漱石作品における非外来語のカタカナ表記の一番の意図は、音の強調にあったと言いうことができよう。

3.3 特別な表現意図または語の周辺の意味

上述した慣習的な特殊表記や音の強調などの語以外に、漱石作品においてカタカナ表記されている非外来語は和語、感嘆詞、擬態語、動植物名とその他が見られる。

【和語】

まず、カタカナ表記になっている和語の場合、その表記の所以を考えるに斎藤（2004）の論点が有効であると考えられる。斎藤（2004）では、語

には中心的部分を占める「概念的意味」及び周辺の部分的な部分に位置する「周辺の意味」があり、「周辺の意味」というのは「感情的意味」や「文体的特徴」のことであり、と指摘されている。例えば、「がき」という語には「こども」という概念的意味のほかに、「卑しめて言う」という感情的な意味も含まれており、「食う」は「食べる」より文体上ぞんざいなニュアンスがあり、文体上の周辺の意味を有するということである⁷。

漱石作品においてカタカナ表記されている和語の例としては、「イカサマ師」「エソ」（「壊疽」）「ガサツ」「ガセイ」「ゴロツキ」「タンカ（を切る）」「スリ/スリ泥棒」「ツボラ」「ポン引き」「フケ」と10例挙げられるが、これらはいずれも語自身の有する語彙の意味がマイナス的なニュアンスを帯びているもので、言語使用主体の漱石はわざわざカタカナ表記を用いてその語のマイナス的な「周辺の意味」（「感情的意味」）を表現しようとしたものと考えられる。

一方、語自身は「周辺の意味」を特にはもたないが、文脈または物語の内容からして作者漱石の特別な表現意図が含まれている例も見られる。例えば、『坑夫』という作品に見られる「アテシコ」、「シキ」、「スノコ」というカタカナ表記和語の例である。「アテシコ」は尻あて用の一種のわら布団であるが、坑夫たちが休憩する時によく使うものとして登場する。「シキ」とは「鉾山の坑道」「鉾坑」のことであるが、小説の舞台としての特別な場所である。また、「スノコ」というのは、鉾山にある鉾石のクズ捨て場とされ、これも『坑夫』という小説の内容と関係する特別なものである。要するに、「アテシコ」、「シキ」や「スノコ」は小説の背景と関わる特殊な語彙で、これらがカタカナで表記されていることは、作者漱石の物語における特別な表現意図が込められているものではないだろうか。

なお、一般語彙としての和語のなかにもカタカナで表記されている例が見られる。例えば、

(1) フロックはまだ我慢が出来るが白髪の チョン髷ははなはだ奇観である。評判の鉄扇はどうかと目を注げると膝の横にちゃんと引きつけている。
（『吾輩は猫である』）

(2) 須永は「今日内幸町からイトコが来て」とたしかに云ったが、そのイトコが彼の叔父さんの子である事は疑うまでもない。しかしその子が男であるか女であるかは不完全な日本語のまるで関係しないところである。
（『彼岸過迄』）

この「チョン髷」や「イトコ」も、前後の文脈からして、その髪型の特殊さや従兄弟に対しても特別な感情的意味が読み取られるもので、言い換えれば、漱石の表現意図が観察されるものであると言える。他に、「カゴ」「コダワって」「サバ（を読む）」「シキ」（「白い絹」の意）「タタキ」「ダンピラ」「ツユ」「ドテラ」「ナール」「ニヤン運」「ハタキ」「ホヤ」「ヤスリ」などもこの類の例である。

ここで、前述の、ひらがなや漢字で表記される多義語の「第一義と異なる特定の意味」をカタカナ表記をもって表現するという岡村（2005）の主張、及びカタカナ表記語は「漢字表記語の一種の同音異義語」という奥垣内（2010）の論述との関連性を考えてみよう。上に挙げた漱石作品に用いられているカタカナ表記の「イカサマ師」や「エソ」などの和語は語自身の概念的意味もなおそのまま存在しているものであり、つまり、「第一義と異なる意味」でもなく、そして「同音異義語」でもないのである。むしろ、これらの語は斎藤氏の言う「概念的意味」以外に「周辺の意味」（「感情的意味」）をも帯びているもので、その周辺の意味がより強くはたらいっていると思われる。即ち、「イカサマ師」や「エソ」などの和語は、カタカナ表記をもって、漢字やひらがな表記の表す概念的意味をやや背景化させ、その周辺の意味を際立たせているものとして考えられるのである。

一方、「アテシコ」などのような語は、それ自体は感情的な意味（周辺の意味）を特には持たな

いが、作品の文脈、もしくは物語における漱石の特別な表現意図によってカタカナ表記がなされているものと考えられよう。

ここで「イカサマ師」という語例をもって斎藤氏の言う「概念的意味」と「周辺の意味」の表記への影響について再び説明する。

(3) さすがのおれも是にはあきれた。世の中はいかさま師許りで、御互に乗せつこをして居るのかも知れない。いやになつた。よほど酔っていた。
（『坊っちゃん』 p.324）

(4) ハイカラ野郎の、ベテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モンガーの、岡っ引きの、わん／＼鳴けば犬も同然な奴とでも云ふがいゝ」
（『坊っちゃん』 p.363）

(5) 「何遍でもやるさ、いゝか。——ハイカラ野郎のベテン師の、イカサマ師の……」
（『坊っちゃん』 p.363）

(6) 「両君そりゃひどい、一逃げるなんて、一僕が居るうちは決して逃さない、さあのみ玉へ。一いかさま師? 一面白い、いかさま面白い。一さあ飲み玉へ」
（『坊っちゃん』 p.364）

(7) 「さあ、諸君、いかさま師を引つ張つて来た。さあ飲ましてくれ玉へ。いかさま師をうんと云ふ程、酔はしてくれ玉へ。君逃げちやいかん」
（『坊っちゃん』 p.364）

ここに挙げたように、『坊っちゃん』という小説に、「イカサマ師」という語は、ひらがな表記とカタカナ表記によってその表現意図が変わることがある。例えば、(3)では一般のいかさま師というタイプの人をさして言うのに対して、(4)と(5)の記述では主人公の坊っちゃんが「赤シャツ」教頭先生のことをさして罵っている文面であり、漱石はその坊っちゃんの怒りの感情的意味を表すために、特別にカタカナ表記を用いたのではないかと考えられよう。一方、すぐ次頁 (p.364) にまた「いかさま師」という語が出ている(6)と(7)だが、ここはまだ(4)と(5)に続いて同じ酒飲みの場面ではあるが、今度は坊っちゃんの台詞ではなく、

他の二人の酒飲みの言った言葉であり、二人は別に「赤シャツ」教頭を罵っているわけではなく、ただ面白がって言っているだけであり、従って、漱石はここでは別にカタカナ表記を使わないのである。

要するに、(4)と(5)では、漱石は「いかさま師」という語の「概念的意味」を背景化させ、周辺の意味を際立たせるために、カタカナ表記を用いたのに対し、(6)と(7)の記述では「いかさま師」の周辺の意味を特に強調する必要もなく、単純に概念的意味を表せば十分なので、普通のひらがな表記を用いたわけであろう。同じ場面の(4)(5)と(6)(7)においては、漱石が同じ語に対して異なる表記を用いて表現意図を表し分けているという特別な表記態度が見られ、非常に興味深い。

【感嘆詞】

感嘆詞もよくカタカナ表記される語である。まず、前述した和語と同じく語自身が周辺の意味をもつ語から挙げると、例えば、「コーラッ」（「こら」の強調形）、「畜生ッ」「馬鹿ッ」「ペランメー」（「ペらぼうめ」の強調形）などの罵倒語や、「ウフン」「フン」などの不満、軽視のニュアンスを表す語、人を疑ったり馬鹿にしたりする「へー」「へー」」「へゝゝゝ」「へゝゝゝゝ」、また軽んずる気持ちを抱く「ヘン」などは、いずれも話し手の感情的意味を込めて発する語である。これらは語の周辺の意味（感情的意味）を強調したり際立たせたりするために、漱石がわざとカタカナで表記したものと考えられる。

一方、他に、驚きや喜びを表す「あッ」「あらッ」「えッ」「ワッ」「ヒヤゝゝゝ」「ヤ」と呼びかけの「エーイ」、そして注意を引き付ける「エヘン」は、感情的意味はもたないが、カタカナ表記または語の後ろにカタカナ表記の促音「ッ」の添加によって、物語や文脈上の作者漱石の表現意図を表したものであると思われる。

要するに、漱石作品における感嘆詞も、語自身の有する周辺の意味または文脈上作者の感情的な

表現意図を表すために、カタカナ表記が取られていると考えることができよう。

【擬態語】

前掲の成田（2009）によると、『坊っちゃん』にカタカナ表記の擬音語の例はあるものの、擬態語はないとする。ところが、漱石の他の作品を調べてみると、カタカナで表記される擬態語が23例ヒットした。例えば、「ゴシ／＼」「ゴツと」「スーと」「キヨト／＼」「コソ／＼」「ミチリ／＼」「モゴ／＼」などのような人の動きや様子を表す語、そして「カツカツ」「テラ／＼」といった事象の状態や、「フハフハ」「パツと」「ポカんと」などのような変化が突然、瞬時に現れたりするさまを表す擬態語が見られた。おおむね急な動作または力を入れる動きや行為を表すものが多い。即ち、漱石の作品には、音を強調する擬音語の他に、急な動きや様子を大げさに強調したりするための擬態語もカタカナ表記で用いられることがある。このように人の動きや様態をカタカナ表記によって大げさに強調するというのも、漱石の表現意図の一つとして捉えることができよう。

【動植物名】

中山（1998）と成田（2009）には、動植物名はカタカナ表記されるものがあるとの指摘もある。漱石作品にもカタカナで表記される動植物名が見られ、「イナゴ」「膂膂（オツトセイ）」「ゴルキ」「スツボン」「バツタ」「モンガー」「ペン／＼草」「ハツ手」と8語が挙げられる。漱石によるこれらの表記にも物語や文脈上特殊な役割もしくは効果があったように思われる。例えば、『坊っちゃん』の主人公が生徒たちによってバツタを布団に入れられる場面で、主人公と生徒たち、バツタとの合戦の様子が生き生きと描写されているが、その際に「バツタ」と「イナゴ」というカタカナ表記が漱石の特殊な表現意図でも強調的にうかがえよう。

【その他】

今回の漱石作品における非外来語のカタカナ表記語の調査では「シチウ」「トチメンポー」とい

う特殊な二例が見られた。

「シチウ」は『坑夫』に出ている語であり、和語ではなく、和製の漢語だと考えられるが、坑道で働く作業員の一種らしく、「支柱夫。坑道の保守作業に当たった」と説明されている⁸。この「支柱夫」をカタカナで表記することによって、その専門性を際立たせるといふ、物語上の特別な表現意図を垣間見ることができよう。

一方、「トチメンポー」は『吾輩は猫である』に出ている料理名で、その解説には「日本派の俳人椋面坊の俳号を借りて西洋料理の名らしくいった洒落」とあるが⁹、これからもなお、カタカナ表記による、漱石の洒落た特別な表現意図がうかがえるといえよう。

上の3節に見られる和語、感嘆詞、擬態語、動植物名とその他の例のカタカナ表記は、作者漱石の意図した感情的意味によるものと考えられる。その意図した感情的意味とは、漱石の作品の中の文脈や物語における特別な表現意図、また語自身の有する周辺の意味（感情的意味）も含まれていると考えられる。

4. おわりに

本稿では『吾輩は猫である』をはじめ、『坊っちゃん』などの14作品におけるカタカナ表記の非外来語を調査し分析した。その結果、非外来語のカタカナ表記例は十種類にまとめることができたが、その殆どは和語であることをまず確認できた。なお、これらの語をカタカナで表記した理由としては、慣習的な特殊表記、音の強調、そして特別な表現意図または周辺の意味の三つのタイプに分類できると思われる。その異なり語数は、音を強調するものが一番多く、特別な表現意図または周辺の意味のものが次で、慣習的な特殊表記が一番少ない。前の両者が漱石作品における、非外来語のカタカナ表記の主な理由と考えることができる。言わば、漱石作品における非外来語のカタ

カナの表記の機能は、音を強調すること以外に、意図した（文脈と語の）感情的意味を表すことにもあるということである。

表音機能はカタカナの本来有する機能であり、カタカナ表記はその表音機能を大いに果たすのである。それ以外に、カタカナは「漢字ひらがな混じり文を中心とする言語生活の中での、少数派」という性質をもつ故¹⁰、カタカナで表記しなくてもいいものを敢えてカタカナ表記することは、この少数派という性質が活かされることになり、その結果として強調や目立たせという効果が出るわけなのであろう。

ところで、上述した十種類のカタカナ表記の非外来語を漱石作品におけるカタカナ表記の「モノ」と考えるとすると、その「モノ」を通して、漱石が作品の中で狙った音の強調や意図した感情的意味の具現といった、作品における漱石の表現意図―「コト」を表そうとしていたと考えられなくもないだろう。

注

- 1 成田（2009：147）を参照。
- 2 考察に取り上げた作品は『吾輩は猫である』『坊っちゃん』『草枕』『野分』『虞美人草』『坑夫』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『心』『道草』『明暗』の14冊である。
- 3 成田（2004：53）及び許（2019：10）を参照。
- 4 成田（2009：150-151）を参照。
- 5 成田（2009：150-153）を参照。
- 6 町（2000：5）を参照。
- 7 斎藤（2004）の第4章を参照。
- 8 『定本 漱石全集 第五巻』629頁。
- 9 『定本 漱石全集 第一巻』583頁。
- 10 村中・黎（2013：121）を参照。

参考文献

- 奥垣内健（2010）「カタカナ表記語の意味についての一考察：身体性とイメージの観点から」『言語科学論集』
- 岡村さやか（2005）「片仮名表記されやすい外来語の性質」『日本語研究』第25号
- 許夏玲（2019）「非外来語のカタカナ表記にみられる

- 言語使用者の心的態度」（人工知能学会研究会資料）（第85回言語・音声理解と対話処理研究会）
- 中山恵利子（1998）「非外来語の片仮名表記」『日本語教育』96号
- 斎藤倫明（2004）「第1部 第4章 語構成と語の周辺の意味」『語彙論的語構成論』（ひつじ書房）
- 成田徹男（2004）「現代日本語の表記体系と表記戦略―カタカナの使い方の変化」『人間文化研究』第2号
- 成田徹男（2009）「夏目漱石『坊っちゃん』の文字表記と語種―カタカナの使い方をめぐって―その2」『人間文化研究』第11号
- 町博光（2000）「日本語俗語の音声的特徴」『国文学攷』165
- 村中淑子・黎婉珊（2013）「中上級日本語教科書における非外来語のカタカナ表記の実態」『国際文化論集』（48）